

『ぼくはイエローで ホワイトで ちょっとブルー』



Kouichi Abe
安部
光堯

その（１）

（ブレディみかこ）

コロナが、過ぎ去ろうとして 次に来るものは何だろうかと気になる昨今だ。

そんな時、実は、私は、東大法学部教授が、回し読みして、一気読みしていると言う噂の本があると言うので、ブランド好みの私は、つい買って読むことにした。

この本は、基本的には、日本人の女性が、アイルランド人と結婚して、イギリスのブライトンという町で、中学生の男の子の子育てををすると言う奮闘記だ。

ハーフで思春期の子供を、多国籍が入り混じっているそれも貧困公立中学校で、自分のアイデンティティをどう捉えるかとか、

イギリスが抱える貧困や格差、EU 離脱がもたらす分断と対立の中で、どう母子が、教育に向き合い、子供の成長を育んで行くかというのが内容になっている。

ここまで、書くと、その様な本は何度か見たことがあるという答えが返って来そうである。

しかし、読んでみると、実に新しい！

2019年ノンフィクション本屋大賞を受賞したのも成る程という感じである。

何処がそうなのか？

この本は、通りいっぺんの英国滞在記ではなく、新たな社会批評、これからの生き方への問いかけを持っている。



比喩的に言えば、色々な鉱脈を持っている。

例えば、舞台となった元底辺中学校では、シチズンシップエデュケーション（市民教育）と言う授業がある。

この授業は、「社会において充実した積極的な役割を果たす準備をする為の知識とスキル、理解を生徒達に提供することを助ける。」

「とりわけ、デモクラシーと政府、法の制定と順守に対する生徒達の強い認識と理解を育むものでなくてはならない」と書かれている。

「シチズンシップエデュケーションは、政治や社会の問題を批評的に探究し、エビデンスを見極め、ディベートし、根拠ある主張を行うためのスキルと知識を生徒達に授ける授業でなくてはならない」とされている。

5年間の中学生生活の3年目からは、議会制民主主義や自由の概念、政党の役割、法の本質や司法制度、市民活動、予算の重要性などを学ぶらしい。こんな事を中学生の時から学習するのである。

そして、筆者の子どもに出された期末試験の問題は、「エンパシー（empathy）とは何か」だった。

エンパシーとは、日本語では、共感、感情移入、自己移入とか訳されている言葉である。

その問題に対して、筆者の子の答えは「自分で誰かの靴を履いてみる」と書いたそうである。

これは、英語の定型表現らしい。「他人の立場に立ってみる」と言うことである。

ケンブリッジ英英辞典のサイトでは、エンパシーの意味は、「自分がその人の立場だったらどうだろうと想像することによって誰かの感情や経験を分かち合う能力と書かれている。



日本でも、自分で優秀と言われる人や、会社のトップにいる人で、自分の自説を曲げない人をよく見るがエンパシーの欠如と言う言い方ができる。

これとよく似た言葉でシンパシーという言葉がある。シンパシーは、かわいそうな立場の人や問題を抱えた人、自分と似たような意見を持っている人に対して人間が抱く感情のことだから、自分で努力しなくても自然に出て来る。

しかし、エンパシーは、違う。自分と違う理念や信念を持つ人や、別にかわいそうだと思えない人々が何を考えているのだろうと想像する力の事だ。

シンパシーは、感情的状態、エンパシーは知的作業と言えるかもしれないと筆者は、言っている。

この他、この本は、イギリスが抱えている、LGBT やブレクジット (Brexit) について、多様性がどうして必要かつ肯定的でなければならないかを、そもそもアイデンティティとは何かから指摘して主張している。

私は面倒な議論は嫌いなコンサバ (保守派) だったが、そこに深い人間的な本質を見つけて、宗旨替えをしようかと思うほどになっている。

この本は、子育て真っ最中の、お父さんお母さん、学校教育に携わる先生達には、是非読んでもらいたい本と思う。

勿論、子どもの本質を捉えなければ、弁護はできないと思う法律家にとっても必読と思う。

最後にひとつだけ、地方色ある推薦の言葉を言うと、この著者、ブレディみかこさんは、紛れもなく、福岡修猷館高校卒の女性である。流石に、修猷の人達は、男も女も何か変わっている。(私は、昔々、修猷館の予備校に入って、成績がビリでも、九大医学部に受験させる校風に腰抜かした思い出がある。)

彼女は、ジェネレーション x (1965 年生まれ) 世代である。